川崎市総合教育センター研究紀要10:101-116.1997

平成８年度

互いに認め尊重し合う「道徳授業」をめざして

――ブレーンストーミング的手法を活用して――

川崎市総合教育センター　道徳研究会議

互いに認め尊重し合う「道徳授業」をめざして

－ ブレーンストーミング的手法を活用して －

道徳研究会議

菊本　朗[1]　　横山　利浩[2]　　志田　智弘[3]　　大井　澄子[4]
朝倉　安弘[5]　　本告　一生[6]（平成７年度）

道徳教育において、小学校では「人間としてよりよく生きるための基礎・基本となる道徳性の育成」、中学校ではさらに「人間としての生き方についての自覚を深める」ことをめざして指導が進められている。道徳の時間においても、子供の学ぶ意欲を大切にするために興味関心をもつ教材の開発や一人一人の良さを生かす工夫、考えを深めていけるための指導の工夫が求められている。本研究会議では、教員と子供のそれぞれの調査に基づき、学級内において他人の批判や中傷を気にして、授業時の発言に消極的な子供の存在に注目した。こうした子供たちに対する手だてを施すことは、「個に応じた授業」を推進する時重要なことである。そこで道徳授業において、子供たちに対する一手だてとして、話し合い時に「何を発言しても否定されない」「他の人が出した考えに自由に自分の考えを加えたり改良したりできる」等の方式をもったブレーンストーミング的手法を、事前指導を行った上で導入することにした。これを通じて、子供が安心して発言でき、自信をつけることによって、以後の話合いにスムーズに入ることができ、また相手の発言を通じて、より考えを深めることができることを期待し検証を行った。結果として抽出児に対するインタビュー等を通じて一定の有効性を得ることができた。また学級全体での有効性についても同様な結果となった。

キーワード：道徳，興味関心,自己表現,ブレーンストーミング,授業改善,話合い活動

目　　次

はじめに …… １０２
Ⅰ　主題設定の理由 …… １０２
Ⅱ　研究の方法 …… １０２
　１．研究仮説について …… １０２
　２．研究のながれ …… １０３
Ⅲ　研究内容および結果の考察 …… １０４
　１．ブレーンストーミングについて …… １０４
　２．事前指導 …… １０５
　３．授業実践 …… １０６
Ⅳ　まとめと今後の課題 …… １１５
　１．研究のまとめ …… １１５
　２．今後の課題 …… １１６
　おわりに …… １１６
　・参考文献・指導助言者 …… １１６

[1]川崎市立有馬中学校（主任研修員）　[2]川崎市立塚越中学校（研修員）
[3]川崎市立御幸小学校（研修員）　[4]川崎市立登戸小学校（研修員）
[5]川崎市総合教育センター研修指導主事
[6]川崎市立玉川中学校教頭（前川崎市総合教育センター研修指導主事）

はじめに

現代の社会の急速かつ複雑な変化は、人間関係にも大きな影響を及ぼしている。

子供をとりまく家庭・地域に目を向けると核家族化・少子化の中で子供の人権が大切にされる一方で、本当の意味での意思疎通の場面は希薄になり、地域での教育力の低下も指摘されている。

また子供自身も物資にめぐまれる一方、直接に自然に触れ体験する機会が減少し、物を大切にする気持ちや規範意識の低下、欲求に対する自己抑制力の低下、さらには複雑な人間関係からの逃避や思いやりに欠ける傾向も顕著になりつつある。物質面での豊富さに反比例する形で成長期の感受性の強い子供たちの心が貧しくなっていくようにも見受けられる。

こうした社会状況の中、学習指導要領では自ら学ぶ意欲や個性を生かす教育の充実が求められている。道徳教育においても、小学校においては「人間としてよりよく生きるための基礎的な道徳性の確立」、中学校ではさらに、「人間としての生き方についての自覚を深める」ことを目指して指導が進められている。特に道徳の時間においては、子供の学ぶ意欲を大切にするために、興味・関心をもつ教材の開発や一人一人の良さを生かす工夫、そして子供が自分のこととして学び、考えを深めていける指導の工夫が求められてきている。

Ⅰ　主題設定の理由

平成6年度、本市の小・中学校の道徳教育研究会会員に「道徳の時間」についてのアンケート調査を実施した。内容は、道徳の授業における問題点、道徳の資料・評価及び今後の課題である。その中で、小学校では授業の、特に指導過程のワンパターン化、マンネリ化が懸念され、授業の多様な指導方法の研究と工夫、楽しい授業の工夫、多様な資料開発、道徳の時間の確保等が期待されていた。また中学校では、道徳の時間の確保、生徒にわかりやすい資料、多様な資料の開発、体験学習との連携、話合いがなかなか深まらないことからの指導法の工夫等、小・中学校の現状での課題や悩みが多いことが浮き彫りになった。

また平成6年度文部省から出された「道徳教育推進状況調査報告書」では、道徳の全領域40項目にわたって、全国の国公私立小・中学校からの回答の集計結果が出されている。その中で特に私たちの研究において注目されるのは、「道徳の時間の指導を充実させるために各教員に求められること」1）の項目で、小・中学校ともに子供の実態や、考えていることの的確な把握、そして資料の分析、選定及び開発等の資料研究、授業中の子供の反応への適切な対応があがっている。また、「道徳の時間を楽しいと感じている、または興味・関心をもっている子供はどの程度いると思うか」2）の問いに対して、小・中学校とも学年が上がるほど減少している。さらに「道徳教育の充実を図るための今後の課題」3）としては、小・中学校で共通に多いのは、教員の意識の向上とともに、道徳の指導方法等の研修の充実、指導資料の開発整備があがっている。以上は教員側からみた道徳をめぐる問題点や課題といえるが、本市での調査の結果と重なる部分が多い。

次に「道徳の時間」については子供の側にはどのように写っているのであろうか。現代の複雑な社会の状況を反映して私たち教員の意識とはかなり違った見方・感じ方・考え方をしているのではないだろうか、等を含め、限定的ではあるが、本研究会議研修員が勤務する学校の子供から聞き取り調査を実施した。さらに平成4・5年度、当センターの道徳教育研究会議がまとめた「児童生徒の側に立ったアンケート調査」の結果を参考とした。

以上の観点から主題設定にあたって私たちの研究会議では、追求すべきねらいとして以下の5点を設定した。

（1）多様な価値観を持った子供への対処
（2）「道徳の時間」、資料を理解しやすくするための工夫
（3）授業に興味・関心をもたせ、話合いを活発にさせるための工夫
（4）子供がより考えを深めるための工夫
（5）子供の発達段階に合い、身近で簡単に作成可能な補助教材または指導方法の工夫

Ⅱ　研究の方法

1．研究仮説について

（1）文部省道徳教育推進状況調査結果
（2）本市、道徳研究会常任委員からのアンケート
（3）本市、子供の側に立ったアンケート調査
　（平成五年度川崎市総合教育センター道徳研究会議）
（4）研修員の学級での子供からの聞き取り調査

上記の各種調査を参考に、「道徳の時間」において、子供がより興味・関心をもって授業に取り組むために、一年目は「道徳の授業」において、興味・関心が低く、読み物資料を読解するのが苦手な子供に対して補助教材（視聴覚教材）の有効的活用について研究を進めてきた。二年目は一年目の結果をふまえて以下の仮説を設定した。

1、2、3）文部省「道徳教育推進状況調査報告書」1989年、P62、62、72

研究仮説

道徳の授業において相手からの批判的発言や自己の失敗を恐れ、発言に消極的な子供に対して、ブレーンストーミング的な手法を導入することによって、以下の点が改善されるであろう。

批判をおそれずに、安心して発言ができる。
自分の発言に自信を持つことにより話合い活動に積極的に参加できる。
相手の良い面を取り入れ、自己の考えをより鍛え、深められる。

2．研究の流れ

実態調査

教師の側から	子供の側から
・文部省「道徳教育推進状況調査結果」 ・本市での小・中学校道徳常任委員からの調査	・本センター小・中学校子供へのアンケート調査 ・研修員の勤務する学校での聞き取り調査

↓

道徳の授業改善の工夫をめざして

↓

1年目　興味・関心が低く、読み物資料を読解するのが苦手な子供に対して

↓

授業での導入・展開場面で
視聴覚教材の使用（ＯＨＰの導入・場面絵の活用）

↓

事前指導１・・・ 検証授業の実施

↓

2年目　1年目の反省から
（導入場面から展開－話し合い－部分に焦点をあてる）
（子供の情意面・意志的側面に焦点をあてる）

↓

内面的には高いものをもっていても、外に表出するのが苦手な子供に対して
（授業中における発言が消極的な子供）

↓

抽出児の選定方法・・・教師による日常の観察と授業評価尺度プログラムの導入

↓

・子供からの発言を引き出させ、発言に自信をもたせることにより、以後の話合いを活性化させるために
・話合いを通じて、相手の考えを共感的・受容的に受けとめ、自己の考えをより深めるために
・授業に対し容易に取り入れやすいので

↓

授業での話合い場面で
集団思考の中の、ブレーンストーミング的手法を取り入れる

↓

事前指導２・・・・・検証授業（導入・展開前段場面での話し合い）
↓　（展開後段場面での話し合い）
授業分析・・・授業直後の子供へのインタビューを中心に
道徳ノート
↓　授業観察
検証の考察

Ⅲ　研究内容および結果の考察

1．ブレーンストーミングについて

（1）導入の背景

現代の多様な価値観をもった子供たちの中で、特に内面的には高い感性を持ち、知能的にも高い子供たちの中で、集団内において孤立的傾向を示す一群がいる。彼らは学級内においては、文章を書かせればよいものを書くが、発言に対しては消極的傾向を示し、学級内で孤立する場面すら見られる。これは高学年になるにしたがって、顕著になる。平成5年度に当センターで小・中学生に「道徳の時間」に関する調査1）を行った中で、「自分の意見を言っているか」という問いに対して、「あまり言わない」から「ほとんど言わない」までの子供は学年が進むにしたがって増加し、中学3年生では、66％、と高率の値を示した。また、「どうして言わないのか」の問いに対しては、「恥ずかしい。笑われるのが心配。比べられるのがいや」という子供が、小学校高学年、中学校を通じて半数以上ある。（少数ではあるが、学級の雰囲気をあげている子供もいる。）私たち教師が思っている以上に子供たちは他人の目や他者の行動に対して神経を使っている様子がわかる。

道徳の時間においては学級会活動の時間と同じく「話合い」を通じて、授業を成立させることが多く、それも教師と子供との問答を通じて行われることが多い。しかし班を基盤として、話合いを成立させている場合も少数だがみられる。実際、そのための方法として、バズセッションを取り入れて授業を実践した事例がある。多くの子供を参加させることができ、かつ緊張や葛藤が取り除かれる利点もある一方法と考えられる。しかし、たとえ班単位の話合い活動といえども、周囲の子供の意見から、尻込みして発言をひかえたり、班の中でさえ発言をしない、できないという状態や、強い個性を持った子供の意見に流されたりする場合がある。これは高学年になるにしたがって多い。

こうした状況に対し、本研究会議では、社会教育や企業において、一般に用いられている集団思考の手法の一つであるブレーンストーミングを指導過程において使用することによって、子供が話合いの際上記のつまづきを克服できないかと考え、この手法の導入を検討し、検証を試みた。このブレーンストーミング（brain storming）はアメリカで1939年オズボーン（Osborn、A.F）によって考案された集団思考の手法である。「構成員が自発的に提出するアイデアを積み上げ、ある具体的な方法を見つけようとするグループの試みで、実際的な会議のテクニック」[1]と定義されている。主に企業活動においてアイデアをより多く出すための手法として使用されている。わが国でも「発想法」の著者である川喜田二郎氏がKJ法の適用以前にブレーンストーミングを行うことを勧めている。[2] また、オズボーンはこれを教育など多くの分野で応用できることを説いている。

本研究会議では、この方法をまず「道徳の時間」の展開の前段部分と後段部分の話し合いの場面に、それぞれ、位置付け試行することにした。

（2）導入の目的

学級内において、他人の批判や中傷を気にして授業時に発言に消極的な子供の存在が見られる。「個に応じた授業」を推進する時、こうした子供たちに対する手だてを施すことは重要なことである。そこでこういう児童生徒に対する手だてとして、集団思考の一手法であるブレーンストーミングを導入することにした。この手法を通じて、子供たちが以後の話合いにスムーズに入り込め、さらに自分の発言に自信をつけることにより、道徳の授業の目的である考えを深めることができることを期待した。またこうした学級の話合いが、批判・中傷・からかいなどの非生産的なものから、共感的、受容的、創造的雰囲気をもつようになれば、子供たちのものの考え方の幅も広がり、道徳授業改善もより一層推進されるようになるであろう。

（3）導入の対象

小学生・中学生全児童生徒が対象

ただし、発言へのつまずきは、高学年に多いので、小学生は高学年ほど、有効と思われる。

（4）導入にあたっての原則

オズボーンの4つの基本原則3）を道徳の時間に導入し、話し合いでは、「頭の柔軟性を養おう」というタイトルのもとに以下のルールで実施した。

ルール1．相手の意見に対し良い・悪いをいわない。（批判をしない）
ルール2．自由な考えを歓迎する。
ルール3．特に他の人が出した考えに加えたり改良するのは歓迎する。
ルール4．たくさん出すのが良い。

1）川崎市総合教育センター研究紀要第7号(平成5年度)P126

1）A・Fオズボーン『独創力を伸ばせ』ダイヤモンド社 1958年 P.104

2）川喜田二郎『発想法』中央公論社1967年P.67

3）A・Fオズボーン『独創力を伸ばせ』ダイヤモンド社 1958年 P.107

（５）実施にあたっての約束

①一班５～７人までとする。司会・記録をおく。（兼ねてもよい。）また司会・記録とも意見を出してもよい。

②初めに必ずブレーンストーミングの目的と諸注意を言う。

③話合いに慣れるためと能率化のため、学級活動等で事前トレーニングを行う。（事前トレーニングについては、事前指導２を参照）

（６）導入の場面

展開前段場面に対して小学校５年生で実施

導入及び展開後段場面に対して小学校６年生で実施

展開前段場面に対して中学校３年生で実施

（７）導入上の留意点

①「相手への批判ができないのでは、話合いにならないのではないか？」については、オズボーンは自著の中で「グループ・ブレーンストーミングでは、どの提案も快く受けいれられるという－報酬－によって－強化（reinforcement）－されるのである。反対に、従来からの紋切り型の会議は、強い反対発言にあって提案をだめにしてしまうことが多い。この種の妨害は－負の強化－とよばれている。つまり望ましい行動を阻止する要因である。早まった批判は－負の強化－であり、判断を先にのばすのは－正の強化－である。そしてこの判断を先にのばす原則こそ、グループ・ブレーンストーミングに不可欠なものである。」１）のように述べている。つまり話合いの核心をまず先に延ばし「何を言っても大丈夫」という受容的・共感的土壌を作って、そこから、子供の心の内面を深めていこうとするのである。そのあとでも十分批判はできるのである。

②道徳授業において、班討議を行う場合、班で、意見を一つにまとめるという性質のものではないので、留意すべきである。

③集団の高まりは道徳の高まりと表裏一体であることを念頭に、事前指導（リーダー指導を含めて）を十分行う。

（８）抽出児の選定

本研究会議では抽出児は、教員側の抽出児への「見取り」ができる範囲において選定した。まず抽出児を選定するにあたって担任による日頃の子供たちへの観察を中心としたが、より客観性を持たせる意味で、本センターのコンピュータ教育利用研究会議が開発した授業評価尺度（アンケートＡ）プログラムを採用した。これは、子供からの授業評価尺度－子供自身がその授業をどのように受けとめたかを知るためのプログラムで、１８の質問項目を通じて（１）興味・関心（２）コミュニケーション（３）フィット感に分類されてあらわされる。この項目を通じて、今時の授業を子供たちがどう思っているかがわかり、かれらの自己評価を通じて教師の授業改善の一助となると思われる。１年目においては、特に授業での興味・関心の低い子供を抽出した。さらにこれに加えて、読み物資料を読解するのが苦手な子供を加えた。２年目においては、１年目の抽出児選定において、知的側面にかたよったきらいがあったため、意志的側面や情意的側面に重点をおき、特に他人とのコミュニケーションに消極的で、授業中においても手を挙げて意志表示をしない子供にスポットをあてて選定した。

（９）授業分析（インタビューを通じて）

授業分析については、授業中の観察、子供の「道徳ノート」も有効であるが、本研究会議では、授業直後の子供へのインタビューを重視した。またこのインタビューでは、子供の緊張が予想され、返事も必要最小限のＹＥＳｏｒＮＯとなる可能性が高いので、いくつかの配慮が必要である。

（内容）

ブレーンストーミングを導入しての話合いのようす及び感想

（方法および配慮事項）

①趣旨をきちんと説明する。（先生の研究で、成績に関係がなく、したがって正解不正解はないので、感じたことを正直に話してほしい。）

②子供の印象が深いうちに行うため、検証授業直後に実施する。インタビューには授業者はあたらない。（評定は伴わない授業ではあるが、子供にとって何らかの利害関係が出るのではないかという思いを感じさせないため）

③強圧的、誘導尋問的発言は控える。

④こちらの感情を押さえ、受容的態度に徹する。

⑤子供の負担を考慮し、２０分以内におさえる。

⑥内容を後で吟味する意味で、テープレコーダに記録することを承諾してもらう。

⑦協力に対しお礼を言う。

２．事前指導

（１）事前指導１、

道徳の授業において、教師と子供及び子供同士の人間関係が成立していなければ、どんな多様な方法を駆使しても話合いは深まらないであろうし、ましてや子供の内面に迫ることはできない。

---

1) A・Pオズボーン『独創力を伸ばせ』ダイヤモンド社 1958年　P.107

本研究会議においても１年次は下記の　～　の「手だて」を設定し、検証学級において、以下の事前指導を行った。

① なんでも言える雰囲気を作る。
② 友だちの発言に注目させる。
③ 発言の機会を与え、人前で話すことに慣れさせる。
④ 資料に出てくる用語等で、なじみがないものやむずかしいものは事前に授業等で扱ったり体験させたりしておく。

（２）事前指導２、

２年目の検証授業においては、事前指導１、に加えて、集団思考の手法を使用するにあたっての事前でのトレーニングを重視した。まず検証授業で実施するブレーンストーミングについては、いきなり道徳の授業では使用せず、事前に一般的な使われ方、「アイデアを出すこと」に重点を置き、この手法に慣れさせることをめざして学級での班活動において、以下のテーマでの話合いに使用した。

① 「カセットケースの利用方法について」
② 「自宅での１５分の利用方法について」
③ 「アメリカについて知っていること」
④ 「子供祭りで私たちができること」

しかし、この手法は道徳のような心の内面に関わるような場合、一般的なアイデアを出す場合とは同じというわけにはいかない。班競争のような競争原理を導入するのは適切とは思えず、そのために司会のリーダーシップが重要になってくる。そこで、司会者（リーダー）にはあらかじめ次のような①～③の指示を出すことを試みた。

① 批判をしないという原則をしっかり確認させる。
② 楽しい雰囲気作りを心がける。（たとえ競争する状態になってもあくまで雰囲気づくりを心がける。）
③ 特に意見が出にくい場合、自らも発言することによって、相手が意見をつけ加えやすくする。

さらに教師はブレーンストーミングの最中は机間巡視し、意見が出ていない班には指導助言を心がけた。

３．授業実践

授業実践１

（小学校高学年において、ブレーンストーミングを展開前段で取り入れた検証授業）

１．主題名　よく考えて１－（１）[1] 思慮・節度・反省

２．資料名　丸木舟　　（学研）

３．ねらい　自分勝手な行動を慎み、物事を深く考え、節度のある生活態度を養う。

４．本時の展開

[1] 文部省「小学校学習指導要領 第3章 道徳」

	学　習　活　動	支　援　と　留　意　点
導入	１．ボートで遊んだ経験を発表する。 ・近くの多摩川で遊んだ。	o子供たちが知っているボートより、丸木舟は不安定であることを押えておく。
展	２．資料「丸木舟」を読んで話し合う。 o「ぼく」が誘ってもみんな黙ったままで話に乗ってこなかったのはどうしてか。 ・おもしろそうだけど危ない。 ・危ないからしない方がいい。 o「それなら岸づたいにあそこまでならいいだろう」と言った「ぼく」の気持ちはどうだっただろう。 ・どうしても乗りたい。 ・少しくらいなら大丈夫。 o「だいじょうぶだよ。まかせておけ」と言った「ぼく」の気持ちはどうだったか。 ・おもしろいよ。	o読みの視点（主人公「ぼく」の気持ちを考えながら）を与えて教師が範読する。 o興味はあるけれど危ない、仲よしで断りづらい、という２点が考えられる。 o なんとしても乗ってみたい気持ちが強いことに気付かせる。 o「少しくらいなら」という気持ちが失敗のもとになることに気付かせる。 o５～６人の６つのグループで、話し合わせる。ブレーンストーミングで話し合うことによって、全体の中ではあまり発言しない子供が言いやすいようにする。一人一人が言うことによって、主人公の得意な気持ちに同化させ

開	・一度うまくいったんだから大丈夫。 ・自信があるんだ。 ・かっこいいだろう。 ◎人工呼吸が繰り返されたときの「ぼくの気持ちはどうだったか。 ・ぼくが悪かった。　・死なないで。 ・約束を破ってごめん。 ・やめとけば良かった。 3．この話のようなことにならないためにどのようなことに気をつけて生活したら良いと思うか発表する。 ・注意を聞く。 ・危なくないか、いつも考える。	ることができる。これを次の失敗につなげることでねらいに迫る。 o司会兼記録者には前もって進め方の指導をしておく。 o前の活動に引き続きブレーンストーミングで話し合う。いろいろと想像して考え得るものをたくさん出すことによって、ねらいに迫れる。 oグループの発表の後に、質問をする場を設けてはっきりしないところを明確にできるようにしたい。 o子供たちがこれまでの生活について振り返り、これからの望ましい生活の心構えについて考えるようにする。
終末	4．今日の学習の感想をまとめて発表する。	o道徳ノートに自由に感想を書かせ発表させる。

5．ブレーンストーミングによる話合いについての考察

（1）抽出児を中心にして

・抽出児Aさん（小学校5年）

①プロフィール

性　　別	女
家族構成	4人　　長女（弟）
性　　格	落ち着いた生活態度で、まじめである。
学習能力	良い。理解力が優れていて、文章表現は得意である。
学習態度	友だちの話をよく聞いている。自分からは挙手・発言をしない。
日頃の道徳授業	中心人物の心情などをよく考えている。ワークシートには、深く考えた文章が見られる。
対人関係	親しい友達は数人いるが、だれとでも仲良くできる。
専科の先生	人の話をよく聞いて、指示されたことを最後まできちんとやりとげる。
Aプログラムより	コミュニケーションが少し低い。

②授業時の活動

資料の範読のときにはよく集中して聞いている。全体での話し合いのときには挙手は一度もない。1回目のブレーンストーミングのときには、後の方から自分の考えを述べた。2回目は、自分の番が来ると意見を言った。展開後段の全体の話合いでは指名されて「よく考えて行動する」と答えた。

③ワークシートから

「この話を読んで丸木舟に乗りたくてしょうがなくて我慢できないのはわかるけど、もう少し考えて行動した方がいいと思う、自分勝手にしたことを最後に振り返って考えれば、自分のしたことが正しいことだったかどうかわかると思う」と書いていた。

④インタビューから

「全体では恥ずかしいので聞いていた方がよいが、このごろグループの中では発表するようになってきた」「今日は4回発表できて少し自信がついてきた。何回も発表できて嬉しかった。道徳はグループで話し合うのが楽しい」という感想を話していた。また、「自分が考えていなかったことでも友達がちがった意見を出したのを聞いて楽しかった」とも答えていた。

⑤考察

恥ずかしくて全体では発表できないようであるがグループでのブレーンストーミングでは意見が言えるようになってきたようである。これは、小グループであることと反対意見を言われないこととが大きく影響していると思われる。グループの中で安心して発表し、意見を言うことに慣れてくることでさらに大きい場面での発表につながる可能性がある。本人は気付いていないようであるが、自分の意見を聞いて欲しいという気持ちが、「何回も発表できてうれしい」という言葉の中にあるように思う。

ワークシートの中で中心人物の「なんとしても乗ってみたい」という気持ちを理解しながらも、深く考えた行動や反省することにも触れており、本時の

ねらいには迫れたといえる。

・抽出児Ｙさん（小学校５年）

①プロフィール

性　　別	女
家族構成	４人　　長女（妹）
性　　格	おとなしい。心情面は豊かである。
学習能力	やや低い。
学習態度	一生懸命授業に参加している。意欲的である。
日頃の道徳授業	ほとんど発言しない。友達の発表はよく聞いている。
対人関係	一人でいることが多い。自分から友達に声をかけることはあまりない。
専科の先生	まじめに興味をもって取り組んでいるが、なかなか成果に現れない。よく個人的に質問に来る。
Aプログラムより	全体に低い。

②授業時の活動

導入では、２回挙手するが指名されなかった。展開前段の話合いでは、挙手はしない。話は聞いているようだが集中力に欠けるところも見られた。１回目のブレーンストーミングでは発言していなかったが、担任の言葉かけで最後に意見を言う。２回目は、４回意見を言う。後段では、集中力に欠ける様子が見られる。

③ワークシートから

「今日は丸木舟の話で調子に乗ったりしない、いけないことははっきり注意をしなければいけないと思った」と書いていた。「相談する時間があってとても良かった」とも書かれていた。

④インタビューから

話の内容は理解できたということだった。「１回目より２回目の方が発表できて、前に25回発表することができたが、発表することで自信がつく」と話していた。「ブレーンストーミングは楽しく、理由はいろいろな意見が言える、思ったことが言える、反対意見が出ない」しかし「反対意見が出るとがっかりするし、いやな気持ちになる」と述べていた。「始めは主人公が悪いと思っていたが、学習の終わりには主人公は最後は反省しているし後悔もしているからそんなに悪い人ではないと思った」と語っていた。

⑤考察

以前にブレーンストーミングでチャンピオンになったことで発表することに自信がついたようである。今回は、始めは意見を言わなかったが、担任からの「前のチャンピオン頑張って」という一言で意見を言うことができた。担任の言葉かけも大切だといえる。インタビューから反対意見を恐れていることのわかるＹさんだが、ブレーンストーミングだと反対意見が出ないので安心して話すことができ、たくさん発表することが自信につながってきているといえる。友達のいろいろな意見を聞くことで内容の理解を助けることになり、友達の意見に付け足しをしたり改善したりしていろいろな意見を考えることで、ねらいとする価値について深まった考え方ができるようになるとも考えられる。

（２）クラス全体について

資料選定について

思慮が足りないための小さな失敗は日常よく経験しているはずである。しかし、その失敗について考えたり反省したりすることがあまりないため、同じような失敗を繰り返してしまうことが多いのが現状である。本資料は、命にかかわるような大きなあやまちをもとに、思慮・節度・反省について考えさせるものである。ブレーンストーミングで、事故の起こる直前の中心人物の気持ちと、事故が起きて友達の生命が助かるかどうかわからない時の気持ちとを話し合わせ、たくさんの意見を出させることによって、ねらいに迫れると思われる。

リーダーについて

今まで、学活の時間や道徳の時間を使って何回かブレーンストーミングを行ってきたので、子供たちはリーダーが注意しなければならない「人が話を始めたら静かに聞く雰囲気をつくる」「なかなか意見が出ないときはリーダーが意見を言って、他の人が言いやすいようにする」などのことを理解している。今回の授業では、授業の直前にブレーンストーミングを行うことを話したところ、子供たちの方からリーダーを決めたいという申し出があったため、リーダー決めは各班に任せた。

ブレーンストーミングについて

ブレーンストーミングを行うときには全部の班が記録用紙に議題とメンバーを記入し終わるまで待ってからスタートした。そのために始めるまでに少し時間がかかってしまった。しかしその間、子供たちは自分の意見を考えたりまとめたりすることができたようである。スタートの合図とともにどの班もほとんどの子が挙手していた様子からそれがわかる。

記録用紙から、普段は全体の中で挙手することがあまりない子供もよく発表していたことがわかる。発表の内容は、浅いものからよく考えた深いものまでいろ

いろあるが、人工呼吸しているときの気持ちとして、「頑張れ」「深いところは流れが速かったんだ」「死んだらどうしよう」というような友だちを心配するような考えがはじめは多かった。しかしそのうち「いい気になり過ぎた」「ちくしょう」「やめればよかった」というように自分自身の行動を振り返るような考えへと変わってきた。つまり、量だけを求めて浅い考えや表面的な意見も出る中で、全体に少しずつ考えが深まってきているといえるのではないだろうか。展開後段でもスムーズにいろいろな意見が出てきたのは、中心発問でたくさん意見が出てきたこのことと関係があると考えられる。

普段の学習で班の中の話し合いでもあまり意見を言わなかった児童たちもブレーンストーミングではよく発表し、班では言えても全体では発表しなかった子供たちの中から全体で挙手する子供も現れてきて、発言することに対する抵抗が少しずつ取れてきている。反対意見を言われないブレーンストーミングで、発表することに自信をつけることができると考えられる。さらにこの効果を有効なものとするために、教師の声かけも大切だということも考慮に入れておく必要がある。

（3）その後のクラスの様子について

道徳の話し合いにブレーンストーミングを取り入れた後もブレーンストーミングを入れた道徳の授業を行い、子供の様子を観察してきた。

その結果、今まであまり発言しなかった子供の中に、挙手して発言する子供が見られるようになってきた。クラスで行っている朝のスピーチの感想交流のときに、指名される前に発言する姿が見られ始めた。それからしばらくたって、学習の中でもごくわずかではあるが自分から進んで考えを述べる姿が現れてきた。

そこで、今まであまり発言しなかった子供の中から発言回数がふえてきた子供を選んで、その理由についてインタビューを行った。

発言がふえてきた理由として「変なことを言って、友達に笑われるのではないかと思って言えないことが多かったけれど、今は人のことがあまり気にならなくなった」「意見を言うときに、みんなが自分の方を見るのでそれがすごく嫌だったけれど、今は皆が自分の言おうとしていることを真剣に聞こうとしていることがわかったからあまり嫌ではなくなって言えるようになってきた」ということが挙げられた。クラス全体が自分の言うことを、一生懸命聞こうとしている雰囲気が感じられて意見が言いやすいようである。

また「今まで恥ずかしくて、とても人の前で意見を言うことはできなかった。けれども、この頃はあまり恥ずかしいと思わなくなってきて、少しだけれど自分から手を挙げて意見が言えるようになってきた」「グループで話し合うときは意見が言いやすい。グループで話をしているうちに、いつの間にかクラス全体の中でも発言をしていた」ということも挙げられた。意見を言うことにあまり抵抗を感じない小グループでたくさん話すことによって発言することに慣れて、大勢の前で話すことができるようになってきたということがいえる。

授業実践2

（小学校高学年においてブレーンストーミングを導入および展開後段で取り入れた検証授業）

1．主題名　よりよい学校に　4－（6）[1]「愛校心」

2．資料名　わたしの学校　　（学研）

3．ねらい　学校の一員として自分の役割を自覚し、学校に愛着を持ち、進んでりっぱな校風をつくろうとする心情を育てる。

4．1年目との関連

道徳の授業にたいする興味・関心を高めるためには、視聴覚教材を効果的に活用することも大切である。特に読解力の弱い児童にとっては、絵や写真などを見ることによって資料の内容や発問の意味が理解しやすくなると考えられる。そこで、導入に置いては御幸小学校の古い校舎の写真を見せ、資料に対する興味を高めると共に、発問するときにも絵を活用して、何を聞いているのか分かりやすくした。

1）文部省「小学校学習指導要領 第3章 道徳」

5　展開

	学　習　活　動	支援と留意点
導入	1．写真を見て気のついたことを発表させる。 ・古い校舎だな。　・学校の写真かな。 ・御幸小学校の昔の写真かな。	○御幸小学校の昔の写真を見せる。 ○ブレーンストーミングで話し合わせ、発表させる。
	2．資料「わたしの学校」を読んで話し合う。 ○校舎の立て直しの話を聞いとき、私はどんな気持ちだったか	○読みの視点（主人公の気持ちを考えながら）を与え、教師が範読する。

展開	・やった、外から見てきれいだろう。 ・ぴかぴかの机、いす、何もかも新しくなってうれしい。 ・なんて、すばらしいことだろう。 ○私は落書きしたことを思いだし、どんな気持ちになったのだろう。また、木造校舎のことをどう思っているのだろう ・先生の言葉を思いだし残念に思っている。 ・落書きがなくなるのでほっとした。 ・使ってきた木造校舎がなくなるなんて寂しい。 ・ぴかぴかの床が懐かしい。 ○父や祖父が昔の校舎の思い出や学校のことを真剣に話すのを聞きながら、私はどんなことを考えたのだろう。 ・学校の伝統はみんなが力を合わせて築き上げたものだ。 ・伝統を受け継ぎもっと良い学校にしたい。 ○自分たちの学校をより良くするために、できること、したいことにどんな事がありますか。 ・クリーンの日の清掃活動をしっかりやりたい。 ・委員会活動を頑張る。　・下級生の面倒を見たい。	○新しければ、外から見てきれいなら、それでよいとする主人公の気持ちをとらえさせたい。 ○落書きの思い出を通して木造校舎への愛情を感じている主人公の気持ちに共感させたい。 ○学校には伝統があることに気付かせるとともに、伝統の担い手としてより良い学校を築いていくのは、子供たち一人一人であることにも気付かせたい。 ○５つのグループで話し合わせる。ブレーンストーミングで話合いをさせることで、全体ではほとんど挙手しない子供にも話しやすい雰囲気を作り、発表できるようにしたい。
終末	３、感想を書いて発表する。	

６．ブレーンストーミングによる話合いについての考察

（１）抽出児を中心として

・抽出児Ｈさん（小学校６年生）

①プロフィール

性　別	男
家族構成	４人家族　長男（姉）
性　格	明るく楽しいところもあるが、友達の言葉を気にしすぎるところがある。自己中心的なところもある。
学習能力	普通
学習態度	興味、関心があることには意欲的に取り組むが、集中力、持続力に欠ける。
日頃の道徳授業	発表はほとんどない。自分の考えを持つが、文章表現も苦手である。
対人関係	友達を誘うより誘われるほうである。友達の目を気にするところがある。
専科の先生	やる気があるときとないときの差が大きい。
Ａプログラムより	興味関心、フイット感、コミニュケーションともに低い

②授業時の活動

全体授業のときにはやや落ち着きがなかったが、ブレーンストーミングの時には生き生きとしていた。学校を良くするために「掃除をきちんとする」「使ったものはきちんと片付ける」「昇降口では絶対土足をしない」など、５つの意見を発表することができた。

③ワークシートから

「ブレーンストーミングの話合いで出された友達の意見の中には、実行できそうなものがいっぱいあった」と書かれていた。また、「Ｍさんの生活目標をきちんと守る、という意見が素晴らしいと思う」とも書かれていた。普段の道徳の授業以上によく書いていた。

④インタビューから

「全体で発表するのは自信がなくて恥ずかしい。ブレーンストーミングは少人数なので、間違っても恥ずかしくない」と言うことを話していた。また、「自分も意見をいくつか出せてよかった」とも答えていた。

⑤考察

全体で話し合いをしているときにはやや集中力のない面が見られたが、ブレーンストーミングでは生き生きと自分の意見を発表できた。これは全体の話合いでは「聞いていればよい」という、消極的な考えがあるからではないかと思われる。また、ブレーンストーミングの時には、自分の考えを５つ言うことができたと同時に、それを皆が聞いてくれたことに満足しているようである。「友達の意見を聞いて、実行できそうなことがある」と答えるなど、友だちの意見も良く聞くことができた。

・抽出児Kさん（小学校6年）

①プロフィール

性別	女
家族構成	5人家族　次女（長男、長女）
性　　格	落ち着いた生活態度でおとなしい性格である。人前で話す言葉も小さい。
学習能力	良い
学習態度	読解力、計算能力などが優れているが分かったこともほとんど発表しない。
日頃の道徳授業	発表はほとんどない。ノートに書いてある内容は、よく考えすばらしい。
対人関係	対人関係は悪くないと考えられるが、ポツンと一人でいるときもある。
専科の先生	まじめに取り組むがあまり目立たない
Aプログラムより	全体的に低いがとくにコミニュケーションが低い。

②授業時の活動

「クリーン活動をしっかりやる」「良い子の決まりを良く守る」「花や木を大切にする」と、3つの意見をブレーンストーミングの話し合いのときに発表することができた。全体の話合いのときには硬い表情であったが、ブレーンストーミングの時には笑顔で話していた。全体の話合いのときに指名され、「私もK君と同じで、良い学校は皆で力を合わせて作っていくものだと思う」と、答えることができた。

③ワークシートから

ブレーンストーミングの話合いを通して思ったことを書くところには、「みんな自分の意見や考えがあるし、しかも発表できるところが凄い」と、書かれていた。グループの中でいろいろな意見が出たことに、驚いたようである。

④インタビューから

「ブレーンストーミングの所は話しやすかった。他の人が文句を言ってはいけないので、みんなも自信を持って発表していた」と述べていた。また、全体で発表することが苦手になった理由として、4年生の時の授業で友人から反対意見を言われ、それに答えられなくて自信をなくしたと言う事を話していた。

⑤考察

過去の嫌な思い出が、全体の話合いの中で挙手できない理由の一つになっていたと考えられる。どんどん意欲的に発表できる人に憧れているところもある。ブレーンストーミングでは他の人が批判しないところから、自信を持って発表できた。素晴らしい考えを持っているので、小集団で発表できた自信を全体の場へと結び付けて行きたい。

・抽出児Mさん（小学校6年）

①プロフィール

性別	女
家族構成	4人家族　長女（弟）
性　　格	やさしくおとなしいが、興奮しやすいところもある。まじめな性格であるが細かいことを気にする。
学習能力	普通
学習態度	落ち着いた授業態度である。話はよく聞いているが、的はずれの答えをすることがある。
日頃の道徳授業	挙手することはない。指名されると自分の意見を言うが、考えに深まりはみられない。
対人関係	誘われると誰とでも遊ぶが、親しい友達は少ない。
専科の先生	どんな学習課題にも、まじめに取り組組む。人の目を気にしすぎる。
Aプログラムより	全体的に低い。

②授業時の活動

資料を読む時には集中して読んでいた。全体の話し合いでの挙手はなかった。木造校舎をどう思っているかのところで指名されるが、何も言わずに立っていた。ブレーンストーミングの話合いのときには、「みんな仲よくする」「気持ちよく挨拶をする」の2つの意見を発表した。

③ワークシートから

印象に残った友達の意見を書くところには、「Kさんの意見がとてもよかった」と書かれていた。友達の意見をしっかり聞いていたことが分かる。また、感想については「いろんな人達の意見が一杯出るし、自分の考えも言いやすかった」と書いていた。

④インタビューから

「全体の話合いで発表するのは恥ずかしくて嫌だが、少人数のグループでは話しやすい」「友達の意見に付け加えたり、考えを改良したりすることもできた」と話していた。

⑤考察

全体の場で指名されると緊張して、何を言っていいのか分からなくなってしまうことがある。今日の授業でも指名され、もじもじするだけであった。このように極端に恥ずかしがるところがあるが、ブレーンストーミングでは、自分の意見が自由に言えて満足したようであった。

少人数であるため、緊張感も少なく、表情も明るかった。

（2）クラス全体について

①事前指導について

今回の授業では、あらかじめブレーンストーミングのときのリーダー（司会）を決めておいた。突然小集団になって話し合うことは難しいと考えたからである。そのため授業の中で2回ブレーンストーミングで話し合う場面があったが、どちらも話合いはスムーズに効率よく行われたのではないかと思われる。司会がグループの一人一人順番に考えを発表させる班、意見のある人から発表させる班など、話合いのやり方にも班によって工夫が見られた。

今回はリーダーを教師側から指名したが、今後ブレーンストーミングの話合いを経験することによって、リーダーもみんなが経験できると良い。なお、授業が終わった後のリーダーの感想としては、「友達がいろんな意見を出してくれたのでよかった」「司会と記録を一人でやるのは難しいと思ったが、大丈夫だった」と述べていた。

②ブレーンストーミングについて

普段の道徳の授業では、自分の意見や考えを挙手して発表する子供は限られている傾向がある。そのような実態の中にブレーンストーミングの話合いを導入することで、いろいろな子供の意見や考えが小集団の中で発表されていた。それは後で集めたそれぞれの班の記録からも明らかである。発表の内容については、質より量を求めたところがあり、浅い考えや表面的な意見もあった。全体的には友達の意見を聞いて素晴らしいと思ったり、自分では気付かなかったことが分かったりするなど、友達の意見に共感する子供も多く見られた。例えば、学校をよりよくするためにどんなことができるかと言う発問に対して、「掃除をきちんとする」「ゴミ拾いなどを進んでやる」「昇降口では土足をしない」と、続いて意見が述べられた。つまり、前の人の考えを参考にして、それに付け加えたり、改良したりする「意見の結合と改善」も発表の中に見られた。

このように子供のブレーンストーミングへの取組みは予想以上に意欲的であった。一人一人が考えたことを発表し、それを認め、批判されないことによって、自信を持って発言することができた。ただ、友達の考えの分からないところ、疑問に思うところが質問できないなど、考えを深めたり、高めたりできないという課題も見えてきた。したがって、ブレーンストーミングの導入に当たっては、話し合う場面の吟味がとても大切である。道徳の授業展開の中で、場面によってブレーンストーミングを効果的に導入することによって、子供は自分の考えを意欲的に発表できると考えられる。

（3）その後の様子

道徳の授業、あるいはその他の学習の中でもブレーンストーミングによる話合いを何度か取り入れてきた。抽出児にインタビューをしてみると、「自分の考えを話すことが前よりも好きになった」「特に小集団の中では、自信を持って意見を述べることができる」と言うような話を聞くことができた。全体の話合いの中で、進んで挙手するまでには至っていないが、自分の考えや意見を発表することに以前より自信を持ってきたことは確かである。また、自分の考えを友達が認めてくれることに、満足感や喜びも感じているようである。小集団の話合いの中でつかんだ発表することへの自信は、全体の話合いの場でもかならず生きてくると思われる。

授業実践3

（中学校においてブレーンストーミングを展開前段で取り入れた検証授業）

1．主題名　社会正義　4－（3）[1]

2．資料名　「葛藤」（神奈川県公立中学校教育研究会道徳教育部会編、神奈川県の道徳「きらめき3」）

3．ねらい　真の正義とは何かを考え、だれにでも公平・公正に接し、社会全体の幸福をめざして、行動できる心情を育てる。

4．1年目の研究との関連

本資料は2時間扱いとする。1時間目に飢餓で苦しむアフリカのビデオを見せて、読解力が弱い生徒に対して、イメージを膨らませ、資料内容を理解しやすいようにした。

2時間目の導入では、ピューリッツアー賞を受賞した写真を見せ、興味・関心をひきつけ、資料を読もうとする動機づけを行なった。

5．事前指導

1時間目の指導内容

飢餓で苦しむアフリカのビデオを見せる。

ピューリッツアー賞についての補足説明をする。（歴史・賞金・受賞者のその後）

資料を読ませ、感想文を書かせる。

6．本時の展開

2時間扱いの第2時間目（次頁）

1）文部省「中学校学習指導要領 第3章 道徳」

	展　開　の　大　要	指　導　上　の　留　意　点
導入	①写真を見て、気のついたことを発表させる。 ・このあと子供はどうなったのだろう。 ・こどもの腕や脚はなんて細いのだろう。 ・土が乾いている。・残酷な写真である。	・写真を見て、感じたことを述べさせるが、時間をあまりかけずに、さらりと触れる。 ・この写真を撮った人への批判的な感想も予想される。
展開	②資料を読む。 ③資料の内容を確認する。 ④ブレーンストーミングで話合い。 ケビン・カーターさんは、どんな思いで、一年間もスーダンに潜入したのだろう。彼の心のうちを想像し、言葉にしてみよう。 ◆ ↓ ・カーターさんはその賞をとり、有名になりたかったのだろう。 ・カーターさんはその賞をとり、金儲けをしたかったのだろう。 ・カーターさんは自分のことしか考えず、自分の富や名声のためにスーダンに潜入したのではないのか。 ◎ ↓ ・世界では、飢餓で苦しんでいる国があるんだ。 ・その映像をカメラにおさめ、世界の人に知ってもらうんだ。 ・飢餓を世界の人に知ってもらって、多くの人たちの援助をしてもらうんだ。 ・世界の人たちの援助があれば、スーダンの多くの人が助かるんだ。 ・スーダンの様子を知ってもらえば、食料や物をもっと大切にする人が増えるのではないか。 ・この写真を見て、世界では、平和な暮らしをしていない国があり、平和の尊さを再認識させたい。 ・世界の人に、自国のことだけを考えるのではなく、他国の人のことも考えられるようになってほしい。 ⑤クラス全体での話合い。 ◎カーターさんが写真を撮ったことについてあなたはどう思いますか。 ◆目の前にいる子供がハゲワシにおそわれそうなら、カメラのシャッターを押す前に、子供を助けるのが人間として当然の行動ではないのか。 ★シャッターを切ったあと、ハゲワシを追い払って、少女も襲われず助かった。結果的には、この写真を見て、世界の人に援助する気持ちを芽生えさせたのだから、そんなに批判すべきではない。 ▼カメラのシャッターを押し、写真を撮り、その写真を公表することで、スーダンの飢餓の様子を世界に知らせることができるので、彼の行動は正しいと思う。 ○カーターさんが自殺をしたことについて、あなたはどう思いますか。 ◆世界から批判され自殺するということは、やはり、カーターさんには、名声や富に対する欲があり、そういった批判に絶えかねて、自殺をしたので、仕方がないと思う。 ★世界の人は、カーターさんを批判しているけど、世界の人にカーターさんの行動を批判する資格はないと思う。なぜなら、彼は、自信の危険をおかしてまで、写真をとりにいっている。なにもしない世界の人たちから、非難されるのはかわいそうであり、自殺したとは、気の毒である。 ◎たとえカーターさんに、名声や富に対する欲があったとしても、写真をとることで、スーダンの人が救われるのなら、それはそれでいいことだと思う。彼のスーダンの人を救ってあげたい気持ちが、世界の人に伝わらなかったので、死を選んだのだろうが、自殺する必要はなかったのではないか。	・カーターさんは、内戦が1年も続くスーダンに潜入して、自分の身の危険をおかしていたことをおさえる。 ・ブレーンストーミングで話合いをさせることで、クラス全体で話すことのできない生徒に対し、話しやすい雰囲気をつくり、気軽に発言させたい。 ・6つの生活班で、話合いをさせる。 ・左記のカーターさんに対する批判的な意見は、でにくいと思われる。 ・班で話し合ったことを、数班の代表者に発表させる。 ・左記の発問を中心発問とし、じっくり話合いをさせたい。 ・ブレーンストーミングによる話合いで、自信をつけさせ、日頃あまりクラス全体で発言しない生徒に、発言させたい。 ・カーターさんの行動に賛成意見が多い場合は、主人公や尾崎さんが批判的にとらえていることを、想起させる。 ・カーターさんの行動に反対意見が多い場合は、なぜピューリッツアー賞に輝いたのかを、考えさせる。 ・上記の中心発問の話し合う時間の関係で、このことについて話し合う時間が、多少短縮される場合がある。
まとめ	教師の感想を述べる。 道徳ノートに感想を書かせる。	・生徒の発言をできるだけ生かし、感想を述べたい。

※カーターさんの写真をとった行動に、賛成：◎　反対：◆　同情：★　印とする。

7．ブレーンストーミングによる話合いについての考察

（1）抽出児を中心として

・抽出児　Hさん（中学3年生）

①プロフィール

性　　別	女
家族構成	4人家族　　長女（妹）
性　　格	おとなしく、人との交わりは苦手。自己中心的な傾向もある。
学習能力	普通程度
学習態度	授業態度はおおむねまじめである。
日頃の道徳授業	自分の考えをもっているが、発言はしない。（他人の目が気になる様子）
対人関係	友達も少なく、一人でいることが多い。
Aプログラムから	フィット感・興味関心と比べると、コミュニュケーションが低い。

②授業時の活動

Hさんの属する班では、6つの意見が出される。その中で、「発展途上国の人々に、写真をみせ、頑張れと応援したかった」と発言する。写真を撮ったことに関するクラス全体の話合いでは、挙手して、「みんなに飢えを伝えたい気持ちもあったので、良いとも悪いともいえない」と発言する。その後は、発言するチャンスをのがす。

主人公の自殺に関するクラス全体の話合いでも、挙手して、「命を捨ててはいけないが、まわりから敵視され生きていけなくなった」と発言する。

③道徳ノートから

最初の感想では、「世界の人から批判され、カーターさんはかわいそう。カーターさんだって、少しは罪悪感を感じていたし、一方的にカーターさんを責めるのはどうかと思う」と書いている。

主人公の写真を撮った行動にはどちらかといえば肯定的である。クラス全体の話合いで、反対の意見を聞いているうちに、ちょっと考えがぐらついたが、基本的には変わらなかった。

一方、カーターさんの自殺については、最初の感想では否定的であった。しかし、授業後の感想では、「最後まで、自分の意志を押し通せる人はそんなにいないと思う。カーターさんは、やはり少しは罪悪感を感じ、その罪悪感に絶えきれなくて死んだと思う」と書く。自殺については、どちらかといえば同情的となった。

④インタビューから

「いつもは、比較的周りの目を気にする。全体の前で発言し、気の強い子に変な顔をされたらいやだ。だから、ブレーンストーミングだと安心して話すことができる。小集団で発言すると、自分の考えもだんだんと固まってくる。また、小集団で話すことで、自分と違う考えがあることに気づき、その心構えもでき、全体で話しやすくなる」と、インタビューで答える。しかし、「小集団でも、自分の意見を言った時、言葉に出さないが相手の表情でわかる場合があり、言いにくい時もある」と答えている。

⑤考察

「2時間扱いだったので、資料の内容もよく理解できた。また、ブレーンストーミングの話合いで、自分の考えに自信がつき、反対意見の予想もついた」以上のインタビューでの内容から、全体の話合いで2回挙手し、発言することにつながったと考えられる。また、自分が発言したこともあり、反対意見の発言に対し、自然と注意深く聞くようになった。そして、班の話合いで出た自分と違った考えを、全体の話合いでも確認できた。考えの変容については、基本的には、カーターさんの写真を撮った行動には賛成で、変化はみられない。しかし、反対意見も理解できないわけでもないという気持ちも芽生え、自分と違う考えも認めている。そういった反対意見も受容しながら、最終的に自分の考えを変えなかったことは、自分の考えをさらに深めたことと考えられる。

カーターさんの自殺については、否定的考えから同情的考えに変わってしまった。これは、もともと自殺を否定したのは、生命尊重の立場から自殺を否定していたと思われ、この話合いを通じて、自分も小学校時代いじめられた経験を持つ中で、カーターさんも世界の人々からいじめにあって、かわいそうという考えが強くなったからなのでは？と考えられる。

（2）クラス全体について

ブレーンストーミングによる話合いについて、クラス全員からのアンケート調査によると、小集団（6～7人）による話合いは、新鮮に感じた生徒が多かった。また、「小集団だと発言するチャンスが多くなる」「他人から批判されないので、自分の意見を安心して述べられる」「他人の意見がヒントになり、新たな考えが見つけられる」「他人の意見と自分の意見を比較できる」「小集団で自分が話すことで、自分の考えが再確認ができ、自分の考えが整理される」という感想もあった。

ブレーンストーミングによる話合いをより効果的にするためには、小集団のリーダー（司会兼記録）の養成が不可欠である。「順番に指名する」「人が話し出したら、静かに聞く雰囲気をつくる」「なかなか意見がでない時は、リーダーが自分の意見を言い、周りが話し出したらリーダーは聞き役にまわる」「記録用紙には簡潔に書く」などを徹底することで、有意義な話合いとなる。

今回の授業では、ブレーンストーミングによる話合いをすることで、主人公のとった行動について多面的にと

らえることができた。小集団で意見交換をすることで、どんな賛成意見・反対意見があるのかを事前に確認できたので、全体での話し合う心の準備ができた。したがって、全体では、写真を撮った主人公の行動について、賛成・反対・同情の立場から、よく話合いがされていた。挙手・発言するのは、やはり日頃活発な生徒が主で、ブレーンストーミングの話合いで批判ができなかった分、より積極的に発言していたことが、アンケートからも読みとれた。

また、道徳ノートを見ると、話し合う前は、主人公の写真を撮った行動について、約3分の1が賛成の立場であったが、話し合った後は、その数は約3分の2となる。この中には、自殺した主人公への批判も含まれる。「自殺することは、スーダンの飢えを世界に写真で知らせるという使命を、自分で否定することになる」という意見が多く、本時のねらいに迫るものであった。

（3）その後のクラスの様子について

検証授業以後もブレーンストーミング的手法を用いて、道徳の授業を展開してきた。そして、自分の意見を反対意見をおそれず、どんな場面でも、発表できるクラスづくりを意識してきた。学活の時間でも学級の話合いも、自由に発言できる雰囲気を大切にしてきた。2学期は、体育祭・文化祭・合唱コンクールと行事も多く、話し合う機会が多かった。具体的に言うと、合唱コンクールの選曲。文化祭にクラス参加するか・しないか。参加すると決まったら、どんな形で参加するのか。全体の話合いでは、発言する生徒はほとんど同じだが、抽出児であった生徒も自分の意見を言う場面も見られた。そして、話合いの後には、必ず多数決をとるが、自分と違った考えに決まっても、クラス全体でそれに協力して取り組む姿勢がみられたことは、担任としてうれしかった。

Ⅳ　まとめと今後の課題

1．研究のまとめ

1年目の検証授業によって、教師の前向きな姿勢と効果的な補助教材の活用を図れば、多くの子供は、授業に興味・関心を示し、理解度を増すことは聞き取り調査によって明らかとなった。しかし1枚のＯＨＰ・場面絵においてもその質や提示方法によって、子供の反応は大きく違い、使用方法のむずかしさとともに、一層の工夫が要求されることも明らかとなった。また指導方法や、資料・補助教材においても当該学級の人間関係や子供の個々の状況によって、弾力的に取り組むことが、有効であることが確認された。そして改めて日常での活動を含めた事前指導が授業を成立させる上で重要であるかを再認識させられた。

2年目においては、研究の重点が授業の導入部分や展開前段部分にかたよっていた反省から、展開での特に話合いの部分に対する方策を検討した。さらに抽出児の選定にあたって、昨年度は理解力に乏しく、興味・関心の低い子供というような知的側面にかたよっていた。これらの反省から、2年目においては、意志的側面や情意的側面に焦点をあて、特に今日の授業で顕著になりつつある子供の行動面での特徴に対して注目した。はじめにも述べたように、社会の変化とともに今日の子供の価値観も多様化している。特に多様な子供たちが集団生活を送る学校では、他者との軋轢から、対人関係においていろいろなつまづきを起こす子供が見られる。その中で、今回の「道徳の授業において相手からの批判的発言や自己の失敗を恐れ、発言に消極的な子供」に対する一手だてとして考えたのが、今回の取組である。したがってこの話合いの方法がその組の子供全員に適切な方法というものではない。しかし現学習指導要領にもみられるように、個に応じた指導の重要性に着目した取組の一つであると考えている。本研究会議での特に2年目での話合い活動におけるブレーンストーミング的手法を導入した小・中学校での検証授業における実践から、以下の事項があきらかとなった。

（1）ブレーンストーミングは一般的にはアイデア等を出す場合に使用されることが多いが、心の内面を問う道徳授業においても効果がある。

① 道徳授業の展開の前段・後段部分とも、－相手の発言への批判の禁止項目（ルール1）－により、「安心して発言できる」「発言に自信がもてる」「自分とちがった視点の考えも聞くようになる」「自分とちがう考えを持った人の意見も認める」点において有効である。

② 道徳授業の展開の前段部分では、－結合と改善項目（ルール3）－により、相手の意見を聞くようになり、深い考えも出る場面も見られた。

③ 道徳授業の展開の後段部分（資料から一時離れて考える場面）では、特に小学生では、－結合と改善項目（ルール3）－により、「相手の発言を参考にできる」点においても有効である。

④ 道徳授業の導入・展開の前段・後段部分とも、－量を求める項目（ルール4）－では、発表の内容について、質より量を求めた所があり、その結果多様な意見が出る反面、浅い考えや、表面的な意見も出てきた。

（2）事前指導を行うことは、道徳授業を行う上でも重要であることを確認した。

（３）事前指導を行う際、特に小集団での話合いにおいては、リーダー（司会者）指導は必須であることを確認した。

（４）授業直後のインタビューは子供の内面を知る上で有効であり、同時に授業時での見取りや道徳ノートによる子供の感想を併用することは、子供の内面を知る上で有効である。ただし、授業者以外の教員がインタビューを行うことについては、子供の内面を十分に引き出せたかどうかは、確証が得られなかった。

今回の子供からのインタビューを通じて小集団でのブレーンストーミング的手法の有効性を確認したが、より一層子供の内面を引き出すためにもその回数や学級での班活動の推進等、道徳だけでなく日常での教科指導・特別活動等多方面の取組による協力がのぞましい。最後に本市の常任委員へのアンケート調査で、「子供の価値観が違ってきている。子供の本当の気持ちを引き出さなければ、道徳の時間をやったといえないような気がする・・・」は改めて心に残る。

今後とも子供の本当の気持ちを引き出すべく、子供との間の信頼関係を基礎に多様な指導方法を含め実践を重ねていきたいと思っている。

２．今後の課題

（１）今回抽出児を中心にブレーンストーミング的手法の有効性を検証してきた。しかし、学級全体での効果を長期的視点でとらえる、つまり「学級での話合いが表面的批判・中傷・からかいの非生産的なものから、共感的・受容的・創造的雰囲気を持つことができれば、子供のものの考え方のはばも広がり、道徳の授業改善も一層推進されるであろう」という点については、教科・特別活動・諸行事との関連性を十分視野に入れ、今後研究を進めていくことが望まれる。

（２）授業後のインタビューの仕方を含めた、みとり・評価については、今後十分検討が必要である。

おわりに

本研究会議では、複雑化する社会の中にあって様々なタイプの子供たちの中から、一定の傾向を持った子供に焦点をあて、彼らが、道徳授業時において、より興味・関心を持ち、話合いにおいては互いに認め合い尊重し合える方法を求めていくつかの取組みを試みてきた。この２年間の研究を通じて事前指導と補助教材の活用及び指導方法の実践に、教師の前向きな姿勢が加われば、子供は必ずそれに答えてくれるという手応えを感じた。今後この研究で得たことを生かしつつ、日々の実践をさらに充実させていきたいと考えている。

最後に、本研究を進めるにあたりご多忙にもかかわらず、御指導をいただきました多くの先生方をはじめ、各所属校の校長先生ならびに教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

・参考文献

Ａ・Ｆ・オズボーン　上野　一郎訳
『独創力を伸ばせ』ダイヤモンド社　１９５８年
川喜田二郎『発想法』　中央公論社　１９６７年
辻　功　『教育調査法』　誠文堂新光社　１９７０年
ノーマン・Ｊ・ブル　森岡　卓也訳
『子供の発達段階と道徳教育』　１９７７年
小川一夫『学級経営の心理学』北大路書房　１９７９年
文部省『小学校指導書　道徳編』　１９８９年
文部省『中学校指導書　道徳編』　１９８９年
梶田　叡一『教育評価』　有斐閣双書　１９９２年
文部省『道徳教育推進状況調査報告書』　１９９４年
千葉県総合教育センター研究報告書害２７８号
（平成１年度）
「千葉県小中学校における道徳教育用教材（資料等）に関する研究」
千葉市教育センター研究紀要第３７集　（平成１年度）
「学校教育における基礎・基本に関する研究（４）」
川崎市総合教育センター研究紀要第７号　（平成５年度）
「価値葛藤の場面を取り入れた道徳授業の評価と改善」
川崎市総合教育センター研究紀要第８号　（平成６年度）
「授業へのコンピュータ利用がもたらす効果と変化についての研究」
福岡市教育センター研究報告書第４７３号（平成６年度）
「自分なりの道徳的見方・考え方・感じ方を創り出していく児童生徒の育成」

・指導助言者

玉川大学講師　小川　信夫
（川崎市総合教育センター専門員）
川崎市立小学校道徳教育研究会長　日野林　寛
（川崎市立宮内小学校　校長）
川崎市立向丘小学校　校長　谷川　良子
川崎市立幸町小学校　教頭　照沼　美恵子
川崎市立中学校教育研究会道徳部会長　佐藤　憲助
（川崎市立白鳥中学校　校長）
川崎市立麻生中学校　校長　渡辺　勝夫
川崎市立臨港中学校　教頭　山路　孝重
川崎市教育委員会　指導主事　川嶋　友子
川崎市総合教育センター教育相談員　橋本　貞和